

# 仏教とキリスト教の対論

——井上円了の排耶論——

芹川 博 通

## 一 はじめに——問題の限定

日本における仏教とキリスト教の対論は、キリシタンの渡来以来の歴史をもっているが、ときとして、排耶論や排仏論の形をとる両教の対論は、おおよそ三つの時期に区別してみることができ。その第一期は、キリスト教の伝来から近世初頭の時期であり、ここでは邪教観が前提であって、教義的な対論はあっても、ほとんどが国書論に焦点がしぼられて、思想的な対論は比較的稀薄であったということができる。第二期は、近世末から近代初頭のもので、この時期には、プロテスタントの伝来とその伝道ということに直面して、かなりの思想的な対論の書を見出すことができる。さらに、総合的な仏教の護法論書も現われている。

第三期が明治中期以後の仏教とキリスト教の対論の時期で、こ

の時期は、とくに欧化主義の反動としての国家主義の勃興のときであり、仏教の排耶論がさかんに主張されるようになってきている。

この報告は、仏教とキリスト教の対論の第一回目として、この第三期における仏教の排耶論のなから、「護国愛理」の精神的基盤にもとづきながら、仏教の真理性と、国家主義的な性格から排耶論を展開した井上円了の排耶論を、比較の方法やその基準などに注意を払いながらみてゆこうとするものである。

## 二 円了三十歳前後の哲学・思想の枠組

井上円了（一八五八—一九一九）は、一八八五明治一八年、二十歳で東京大学哲学科を卒業しているが、円了の排耶論に関する著作は、卒業直後の二、三年に主要なものが集中している。

かれの排耶論のおもな著作としては、『破邪新論』（明教社、一八八五年）、『耶蘇教の難目』（無外書房、一八八五年）、『真理金針』初編（山本留吉、一八八六年三月）、続編（山本留吉、一八八六年一月）、続々編（長沼清忠、一八八七年一月）の三編、それに『仏教活論』序論（哲学書院、一八八七年二月）、破邪活論（同上、一八八七年一月）、頭正活論（同上、一八九〇年九月）、護法活論（または活仏教）（丙午出版社、一九二二年）の四編からのものなどがある。ここで取扱う『真理金針』三編と、『仏教活論』序論と破邪活論の二編は、ともに円了三十歳前のものである。

円了のこの時期の哲学や思想を表わす著作には、『哲学新論』（一八八五年）、『哲学』夕話』全三編（哲学書院、一八八六―一八七七年）、『哲学要領』前・後編（同上、一八八六―一八七七年）、『心理学講義』（同上、一八八七年）、『心理摘要』（同上、一八八七年）、『妖怪玄談』（同上、一八八七年）、『哲学道中記』（同上、一八八七年）、『倫理通論』上・下（普及社、一八八七年）、『實際的宗教学』（一八八七年）などがある。

ところで、円了の哲学は、現象即实在論といわれる<sup>(1)</sup>。円了の現象即实在論の特色は、その根底に、物即心、理即物心の思想があることである。つまり、「世界は物のみにして心なしと立つるもの」である唯物論も、「世界は心の中にありて其外に物なしと立つるもの」である唯心論も、さらに「物心二者を統合して非物非心の理」を本とし、「其理の外に物心なしと立つる」唯理論（非

物非心論）をも、中道を得ないものとしりぞけるのである。しかも、唯物にもあらず、唯心にもあらず、觀念即实在、現象即实在の立場であって、この意味での唯心論でなければならず、円了はこれに、新唯心論の名称を与えている。

円了が純正哲学と訳した哲学の一部門は、哲学の哲学たる本質をよく表わすもので、純正哲学とは「物・心・理三体の性質規則」を理論的に考究するものである。

また、円了は哲学（純正哲学）と宗教の関連について、哲学は、物体を対象とする物体哲学（客観論）と、心体を対象とする心体哲学（主観論）と、理体を対象とする理体哲学（理想論）からなりたっており、応用学である宗教学は、物をめぐって展開される物宗学（＝有宗学）と、心をめぐって展開される心宗学（＝空宗学）と、理をめぐって展開される理宗学（＝中宗学）とからなっているとするのである。これらは総括して智力的宗教学とよばれ、仏教中の聖道門をこれに当てている。仏教は「純正哲学直接の応用」なのである。

さらにまた、円了は、科学も宗教にとつて調和するものとして受けとめ、倫理は宗教にいたる「必須の要件」あるいは「方便」にすぎないものとしている。

円了は、これらの枠組のもとに仏教理解をおこない、仏教とキリスト教の対論がなされ、仏教の排耶論が進められているのである。

### 三 円了の排耶論(1)——『真理金針』の場合

明治二〇年前後に集中する円了の排耶書のなかから、『真理金針』と『仏教活論』の二部をとりあげ、それらにみられる排耶論をみてゆきたい。したがって、円了の排耶論の基盤には、上述のような哲学・思想の枠組がほぼ確立しつつあったことを考慮しなければならぬ。

『真理金針』からみていくことにしたい。『真理金針』は、初編、続編、続々編の三編からなっている。初編は「耶蘇教を排するは理論にあるか」、続編は「耶蘇教を排するは実際にあるか」、そして続々編は「仏教は智力情感両全の宗教なる所以を論ず」の各課題が論じられている。以下において、各編を概観し、そこにみられる円了の排耶論の内容と、その比較方法や問題点を指摘することにしたい。

『真理金針』初編では、仏教の理論によって耶蘇教を排し尽すことは困難なことであるけれども、将来の仏教の盛衰は論理を研究して、理論上自教の眞実を開き、耶蘇教の虚妄を示すことにあらうとして、

第一 耶蘇教を修むること。

第二 耶蘇教を研ぐこと。

の二点の作業をおこなない、耶蘇教の所説が論理に合わず、事実に適しない点を一二項目にわたって示し、これらの諸点より、耶蘇

教を論破している。その一二項目とは、

第一 地球中心説

第二 人類主義説

第三 自由意志説

第四 善悪禍福説

第五 神力不測説

第六 時空終始説

第七 心外有神説

第八 物外有神説

第九 真理標準説

第十 教理変遷説

第十一 人類起源論

第十二 東洋無教説

この一二項目にわたる排耶論を重ねて、円了は、理論上耶蘇教を排する諸点として、次の一一項目を示している。

第一 耶蘇教の創造説は理学の進化論と両立す可らざる事。

第二 天帝と時空の關係明かならざる事。

第三 神人の關係明かならざる事。

第四 天帝と物心の關係明かならざる事。

第五 天帝と可知不可知の關係明かならざる事。

第六 天帝自在力を有する所以明かならざる事。

第七 天帝と因果の關係明かならざる事。

第八 天帝と真理の關係明かならざること。

第九 天帝と善惡賞罰の關係明かならざること。

第十 人と動植の區別然たらざること。

第十一 耶穌教に確乎たる定説なきこと。

前論の二二項目とこの一一項目は、順序は異なるけれども、その内容は同一のものであって、前論の要点を略記したものが、この一一項目である。つまるところ、仏教は科学や西洋哲学と理論的に合致するものであるけれども、キリスト教は科学や西洋哲学にあい入れないもので、理論的でないことを指摘している。

最後に、初編を帰結するにあたって、耶穌教の創造説と仏教の唯心論とを比較して、仏教の唯心論が論理的に適合していることを証示しているのである。

次に、『真理金針』続編「耶穌教を排するは實際にあるか」で、円了は、排耶論の實際論を展開するにあたって、仏教がキリスト教に比べて、「護法愛國」の精神が強く存在することから論じている。

はじめに、仏教の「愛國」面の実益から論じられてゆき、「愛國」面の実益の要点を五カ条にわたって示している。

第一条 國際上に関して実益を与ふる事。

第二条 政治上に関して実益を与ふる事。

第三条 道徳上に関して実益を与ふる事。

第四条 教育上に関して実益を与ふる事。

第五条 開明上に関して実益を与ふる事。

つづいて、仏教の「護法」面の實際を論じるのに、以下のような四つの要目を掲げ、これらを論究して、護法の良策は理論にあらずして實際にあることを、論じている。

第一 社会一般の事情

第二 日本今日の事情

第三 宗教一般の事情

第四 仏教今日の事情

以上の諸点からして、耶穌教を排するにしても、仏教を将来にさかんにするのも、實際の改良を計るより急務なるはないのであって、仏教の護法の第一には、僧侶をして世間の実益を起させることであるというのである。

仏教を再興するには社会の実益を起すことであり、そのためには仏教の改良も必要になってくるのであって、円了が仏教の改良を主唱するのは、仏教を愛するからであり、仏教が真理に合致し、開明に適し、国益を助けるところがあるからであって、耶穌教を排するのは、耶穌教をにくむからではなくて、それが真理に反し、開明を妨げ、国益を与えないからであるというのである。

『真理金針』続々編「仏教は智力情感両全の宗教なる所以を論ず」では、仏教は、つまるところ、聖道門と浄土門を兼ね備えた智力と情感の宗教であることを述べており、このことを円了は、「仏教は智力情感両全の宗教にして、耶穌教は情感一辺の宗教」

であるというのである。

まず、釈迦の哲学が仏教と位置づけ、仏教諸宗派（諸学派）を西洋哲学に配当して、小乗諸宗は主観的唯物論であり、大乘の初門は唯心論と定め、仏教は差別平等不二なるをもって中道というのであって、西洋哲学のすべてがこの中道の一边を示すにすぎないとするのである。

この哲学の妙理を宗教の上に応用して安心立命の方法を教えたものが仏教であるとして、聖浄二門の仏教論が展開されている。

「聖道門は表面に智力の宗教を示し、裏面に情感の宗教を含み、浄土門は表面に情感の宗教を示し、裏面に智力の宗教を含むものなり。此表裏両面相合して仏教全体を組成する」と述べている。そして耶蘇教は、上述のように、情感の宗教であるので、耶蘇教は仏教の一部分である理由を、次の五つで示している。

第一 仏教は智力情感両全の宗教なり。耶蘇教は情感一边の宗教なり。

第二 仏教は因果の原理を以て組織せる宗教なり。耶蘇教は因果の原理より派生する所の天帝を以て構成せる宗教なり。

第三 仏教は心性思想を本として立つる宗教なり。耶蘇教は心性思想の作用より想出する所の天帝を本として立つる宗教なり。

第四 仏教は無始無終無生無滅の真如の体を万物万化の本源

として論ずる宗教なり。耶蘇教は真如の一端なる天帝の創造を万物万化の本源として論ずる宗教なり。

第五 仏教は普通の理体を説き、耶蘇教は個体の天帝を設くる宗教なり。

また、耶蘇教が偏僻不公平であるのに対して、仏教は公明正大無偏無党であることを五項目に示して述べ、耶蘇教が仏教の一部分であることを証示している。さらにまた、耶蘇教の真実ならざる所以を示して、ここでもまた、耶蘇教が仏教の一部分に過ぎないことを述べているのである。

#### 四 円了の排耶論(2)——『仏教活論』の場合

排耶の書『仏教活論』は、上述のように四部から成り立っているが、円了の排耶論を知るには、第一部『仏教活論』序論と、第二部『仏教活論』本論、第一「破邪活論」を究めることで充分と思われる。

そこで、まず第一部、序論からみていくことにするが、その冒頭の文に、「余夙ニ仏教ノ世間ニ振ハザルヲ慨シ、自ラ其再興ヲ任ジテ独力実究スルコト已ニ十数年、近頃、始メテ其教ノ泰西講ズル所ノ理哲諸学ノ原理ニ符合スルヲ発見シ、之ヲ世上ニ開示セント欲シテ、爰ニ一大論ヲ起草スルニ至ル。名ケテ仏教活論ト称ス。」とある。ここで円了が仏教を論ずる態度が述べられ、どうしてかが仏教を助け、耶蘇教を排するかの理由が述べられている。

「余ガ仏教ヲ助ケテ耶蘇教ヲ排スルハ、釈迦其人ヲ愛スルニアラズ、耶蘇其人ヲ惡ムニアラズ。唯余ガ愛スル所ノモノハ真理ニシテ、余ガ惡ム所ノモノハ非真理ナリ。今、耶蘇教ハ真理トシテ取ルベカラズ性質アリ、仏教ハ非真理トシテ捨ツベカラザル性質アリ。是レ、余ガ飽クマデ其一ヲ排シ、其二ヲ助クル所以ナリ。」とある。真理と非真理を比較の基準にしているのである。

他方において、円了は、仏教を護り、耶蘇教を排する理由に、  
「護國愛理」あるいは「護法愛國」のために、仏教活論が展開し、排耶論が論じられているのである。

次に、『仏教活論』本論、第一「破邪活論」では、耶蘇教の有神説を排して、仏教の真如説を開くことからはじめている。そしてこの点を論証するにあたって、次の七項目を前提にしてすすめている。

- 第一 耶蘇教ノ有神説ハ陰証アリテ陽証ナシ。
- 第二 實際上必要ナルモノ必ずシモ理論上真理ナルニアラズ。
- 第三 近世学者ノ論中時々有神ノ説アルヲ見ルモ、比言ヲ以テ有神論ノ真ヲ証スルニ足ラズ。
- 第四 哲学書中ニ往々天神ノ字アルヲ見ルモ、之ヲ以テ耶蘇教ノ天神ト同一義ヲ有スルモノトスルノ理ナシ。
- 第五 愛ニ甲乙両説アリテ共ニ臆説ヨリ出ツルモ、一ハ実験説ニ近く、一ハ遠キノ異同ナキニアラズ。

第六 西洋人ノ未タ発見セラル新理ノ却テ東洋学中ニアルモ計リ難キヲ以テ、独リ西洋人ノ論ズル所ヲ取リテ、全ク東洋古来ノ説ヲ排スルノ理ナシ。

第七 耶蘇教ノ天神ハ主觀上ノ天神ニシテ、客觀上ノ天神ニアラズ。

つづけてこれら七項目について解説したのちに、耶蘇教者が天神の实在を証明するのに用いる諸論を、第一「原因論」、第二「秩序論」、第三「進化論」、第四「道德論」、第五「人性論」、第六「神力論」に配列し、それらを論じることによって排耶論が論述され、仏教の頭正活論が用意されていくのである。

「破邪活論」の結論として、五つのことがらが示されているが、これらは要するに、耶蘇教の有神説は空想にして妄説にすぎないことを述べているのである。円了はこのことをさらに約言して、

余ガ説ハ天地ニ開端ノ起源ナキ所以ヲ証明スルモノナリ。即チ天地万物ハ其身不生不滅、無始無終ニシテ、其現ズル所ノ変化ハ循環運行シテ、或ハ進化シ、或ハ退化シ、或ハ開発閉鎖シテ際涯ナキモノナリ。其際涯ナキノ間ニ種々ノ世界ヲ現ジテ、一大世界開キテ亦閉チ、閉チテ亦開クノミ。而シテ其進退開閉シテ際涯ナキハ因果相統、相関ノ一理法アルニヨル。言ヲ換ヘテ之ヲ言ヘバ、万物唯一體、諸法唯一理ナリ。此理ヲ示スモノ諸教中独リ仏教アルノミ。其教中ニ説ク所ノ物体不滅説、因果相統説ハ理学ノ原則タル物質不滅、勢力恒

存ノ理法ト同一ナルモノニシテ、其理法ノ真ナル以上ハ仏説亦真ナリト云ハザルベカラズ。且ツ物質不滅、勢力恒存ノ理法ト天神説ハ両存スベカラザルモノニシテ、不滅説真ナレバ創造説真ナルコト能ハズ。創造説真ナレバ不滅説真ナルコト能ハズ。何者カ已ニ創造アレバ終始生滅アリト云ハザルベカラズ。不生不滅ナレバ創造アルベキ理ナケレバナリ。是レ余ハ仏教ヲ以テ真理トシ、耶蘇教ヲ以テ非真理トスル所以ナリ。と結論づけているのである。つまり、耶蘇教の有神説・創造説が仮定説であり、仏教の唯心論や真如説の正しさが、理学の原則によって、確証されていることを述べているのである。

## 五 円了の排耶論の特色——むすびにかえて

以上のように、井上円了の排耶論を、その著作『真理金針』と『仏教活論』に限定してみると、かれの排耶論の特色として、次のことを示すことができる。

(一) 耶蘇教の創造説と仏教の唯心論を比較して、仏教の唯心論が論理的に適合していることを証示し、理論上耶蘇教を排し得ることを示している。

(二) 耶蘇教を排するのは、仏教が真理に合致し、開明に適し、国益を助けるところがあるのに対して、耶蘇教が真理に反し、開明を妨げ、国益を与えないからである。これは実際論からの排耶論であって、「護法愛國」を基準とした仏教の排耶論

である。

(三) 仏教は智力情感両全の宗教であるが、耶蘇教は情感一辺の宗教であるので、耶蘇教が仏教の一部分であることを証示している。

(四) 排耶論の中心が耶蘇教の非真理性にあることを再び主張して、耶蘇教の有神説を排して、仏教の真如説を開くことが論証されている。ここでは、原因論、秩序論、進化論、道德論、人性論、神力論の諸視点からの仏教の排耶論が論述されている。

(五) 西洋の哲理に仏教の真理を確証した上での仏教の排耶論であるが、単なる感情的なものではなく、理性的性格の強いもので、その意味では、排耶論というよりも、仏教とキリスト教の比較研究、あるいは比較宗教学を志向する態度ということができると思われる。この意味で、仏教とキリスト教の対論にふさわしい論考であると考えるのである。

上述のことから、円了の排耶論にみられる比較の基準は、(一)因果律や進化論といった「理学実験の結果」に対して、つまり「科学に耐える宗教」あるいは「科学の理法に合致した宗教」があげられる。(二)「論理の原則」に応合するかどうか、つまり「哲学に耐えうる宗教」かどうかの基準が指摘される。(三)仏教の唯心論と真如説が、キリスト教の創造説と有神説に対して、論理的適合性という点で対比されている。(四)「護国愛理」あるいは「護法愛國」

の宗教が示され、最後に、(四)「智力と情感」の宗教という基準が示されている。

しかし、円了の仏教理解に対してキリスト教理解の不十分さも指摘することができるし、仏教の現実形態にみられる非科学性については論究がなされていない。さらに、円了の理解した西洋諸思想が、東洋思想の理解に対比し、その皮相性も看過することができない。

いずれにしても、円了の排耶論は、当時としては、もっともすぐれた仏教とキリスト教の対論であり、今日でも多くの示唆を示している両教の比較研究であるということが、本稿の結語である。

(1) 船山信一『明治哲学史研究』ミネルヴァ書房、一九五九年、八〇—一〇一頁を参照されたい。

なお、井上円了の哲学・思想については、峰島旭雄「現象即実在の宗教観——井上円了——」『明治思想家の宗教観』大蔵出版、一九六五年、および同氏「明治期における西洋哲学の受容と展開(7)——井上円了の排耶論——」『早稲田商学』二二六号、一九七六年、におおくよっている。

(2) 次の五項目である。

第一 耶蘇教は真実一法を説き、仏教は真実方便を兼記す。

第二 耶蘇教は人の機根同一なりと定め、仏教は不同なりと定む。

第三 耶蘇教は賞罰に無数の階級を立てず、仏教は無数の階級を分す。

第四 耶蘇教は三世因果を説かず、すべて天帝の故意に帰し、仏教は三世因果を立ててすべて因果応報に帰す。

第五 耶蘇教は転生漸化を説かずして、即得往生を説き、仏教は之

を並説す。

(3) 以下のような五項目を示している。

第一 耶蘇教は陰証ありて陽証なし。

第二 耶蘇教は理学実験の結果に合格せず。

第三 耶蘇教は論理の原則に迎合せず。

第四 耶蘇教は進化の規則に背反す。

第五 耶蘇教は心理の学説に背反す。

(4) 『仏教活論』本論 第一の第十五段「結論」(第七十節)に五項目にわたって排耶論が述べられている。

(せりかわ・ひろみち、宗教学・宗教思想、淑徳短期大学教授)